

2021/08/08

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑥2

『なぜ泣いているのですか』 ヨハネ 20:1-18

「さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。それで、走って、シモン・ペテロと、イエスが愛された、もうひとりの弟子とのところに来て、言った。「だれかが墓から主を取って行きました。主をどこに置いたのか、私たちにはわかりません。」そこでペテロともうひとりの弟子は外に出て来て、墓のほうへ行った。ふたりはいっしょに走ったが、もうひとりの弟子がペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。そして、からだをかがめてのぞき込み、亜麻布が置いてあるのを見たが、中に入らなかった。シモン・ペテロも彼に続いて来て、墓に入り、亜麻布が置いてあって、イエスの頭に巻かれていた布切れは、亜麻布といっしょにはなく、離れた所に巻かれたままになっているのを見た。そのとき、先に墓に着いたもうひとりの弟子も入って来た。そして、見て、信じた。彼らは、イエスが死人の中からよみがえらなければならないという聖書を、まだ理解していなかったのである。それで、弟子たちはまた自分のところに帰って行った。しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。」

(ヨハネ 20:1-11)

マリヤは、イエス様の遺体がないのを見て、誰かに盗まれたのだと思い込みました。イエス様は何度もご自分が復活することを話しておられましたが、マリヤはイエス様のことばをまったく信じていなかったということです。私たちも同じです。イエス様が神様だと信じることはできても、実際に復活したことを信じるのは難しいものです。マリヤの言葉を確認に来た弟子たちも、遺体がないことを見ました。この時、彼らが信じたのは、「遺体がない」という事実です。イエス様のことばではありません。誰も復活を信じてはいなかったのです。

しかし、この後、マリヤと弟子たちの行動は異なります。弟子たちは、遺体がないのを確認すると、そのまま家に帰ってしまいましたが、マリヤはとどまって、墓を覗き込みました。それは、マリヤが絶望していたからです。彼女は、最後までイエス様を信じて十字架を見届けた姉妹の一人です。復活を信じることはできないけれども、空の墓を見てどうしようもない絶望を感じ、墓から動くことができなかつたのです。

ここに彼女と弟子たちとの違いがありました。弟子たちは、現実と向き合うことをせず、その結果、絶望もしませんでした。

「すると、ふたりの御使いが、イエスのからだが置かれていた場所に、ひとりは頭のところに、ひとりは足のところに、白い衣をまとしてすわっているのが見えた。彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「だれかが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」彼女はこう言うことから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。」(ヨハネ 20:12-14)

絶望の中にいたマリヤに、イエス様が「なぜ泣いているのですか。」と声を掛けました。マリヤの悲しみは、イエス様がないことです。ところが、目の前にイエス様が来られても、マリヤにはそれがイエス様であることがわかりませんでした。私たちが問題の中にある時も、神様は問題の解決を示して呼び掛けてくださっています。ところが、せっかく神様が問題の解決を示してくださっていても、私たちにはなかなかそれが見えません。しかし、絶望の中に追い込まれることによって、私たちは神の呼びかけを聞いて、用意されている脱出の道を見つけ出すことができるようになるのです。

「イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのであれば、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。」イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ(すなわち、先生)」とイエスに言った。」(ヨハネ 20:15-16)

イエス様は、もう一度彼女に「なぜ泣いているのか」と声をかけてくださいました。神様は、私たちが放置することなく語り続け、信じられるように付き添ってください、さらに助け舟を出してくださるのです。神様があなたを見捨てることはありません。

自分に声をかけている方がイエス様だとわかると、彼女は声を上げました。ヨハネの福音書は、この時のマリヤの感動を表すために、わざわざそれをヘブル語で表記しています。

マリヤは、悲しみでいっぱいのところから、喜びでいっぱいになりました。神様は、私たちの悲しみを喜びに変えてくださいます。

「イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。わたしはまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る』と告げなさい。」マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。」

(ヨハネ 20:17-18)

「マリヤは、イエス様から、弟子たちに伝えに行くように言われ、イエス様の復活を弟子たちに告げました。しかし、弟子たちは彼女の言葉を信用しなかった、とルカの福音書は伝えています。ただ、ペテロだけは「もしかしたら」と、墓に走っていき、空の墓を確認しました。」(ルカ 24:11-12)

■ 悲しみを喜びに変えるステップ

マリヤは悲しみでいっぱいのところから喜びでいっぱいになりました。神様は、悲しみを喜びに変えてくださいます。それは、神は、私たちを否定するものを否定するからです。神様は、私たちを否定する最大のものである死さえも否定して、喜びに変えてくださったのです。

「そればかりではなく、患難さえも喜んでいます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。」（ローマ 5:3-5）

患難は私たちを絶望させます。しかし、絶望にこそ、希望があるのです。本当に絶望したら、神の御手につかまろうとするからです。そうすれば、神様が、御言葉を通して私たちを訓練してください。それは、希望を持たせようとする訓練です。弟子たちは現実から目をそらし逃げましたが、マリヤは絶望しました。そのことが彼女に希望を生んだのです。悲しみを喜びに変えるには、次のようなステップを踏みます。

1. 神の言葉を聞く

この時は、イエスが直接マリヤに声をかけましたが、今は聖書を通して語られます。聖書の中で、最も多いメッセージは「恐れるな。」というメッセージです。神の励ましの言葉を聞きましょう。

「あなたがたの会った試練はみな人の知らないものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ、耐えられるように、試練とともに脱出の道も備えてくださいます。」

（I コリント 10:13）

ただし、試練に対して私たちが知っておかなくてはいけない前提があります。それは、試練は神が与えるものではないということです。このことを覚えておかないと、神様のメッセージを正しく理解できません。試練は神様によって与えられるものではなく、この世界に死が入り込んだことによって生じたものです。しかし、死によって生じたものであっても、神様は脱出の道を備えてくださるのです。ですから、まずは神の言葉を聞くことから始めましょう。

2. 告白する

患難を希望に変えたければ、信じたこと、信じていることを告白しましょう。告白がなければ何も動きません。言葉には力があります。私たちが語る言葉というものが、私たちの方向を決めます。私たちは言葉を正しく使っているでしょうか。神の言葉ではなく肉の言葉を語れば語るほど、私たちはそちらの方向に進んでしまいます。

「私たちはみな、多くの点で失敗をするものです。もし、ことばで失敗をしない人がいたら、その人は、からだ全体もりっぱに制御できる完全な人です。馬を御するために、くつわをその口にかけて、馬のからだ全体を引き回すことができます。また、船を見なさい。あのよう大きな物が、強い風に押されているときでも、ごく小さなかじによって、かじを取る人の思いどおりの所へ持って行かれるのです。同様に、舌も小さな器官ですが、大きなことを言って誇るのです。ご覧なさい。あのよう小さい火があのような大きい森を燃やします。」(ヤコブ 3:2-5)

言葉は私たちの舵です。だから聖書は、あなたが信じるなら、それを告白しなさいと教えています。告白がないと信仰が定まりません。「口で告白して救われる」とありますが、それは、すでに得ている救いを体験するという意味です。神の言葉を信じようと思うなら、告白しましょう。病気になったら、「いやされた」と告白しましょう。現実がどうであれ、神の言葉は真実だと思うなら、信じている内容を告白するのです。

私たちが語る言葉には2種類あります。肉の言葉と神の言葉です。肉の言葉は否定です。神の言葉は肯定です。神の言葉を信じるなら、神の言葉を語りましょう。告白する言葉が、自分の方向を定めます。

3. できることをする

信仰は、聞くことから始まり、告白に進みます。そして、次に必要なのは行いです。行いとは、「自分にできることをする」ということです。いくら方向を定めても、エンジンがかからなければ、車は前に進みません。

残念なことに、信仰を告白しても、この行いが伴わない人が多いのです。自分でできる限り頑張っ自分で完成させよということではありません。自分にできることがあるのに、それをやろうとしない人が多いのです。

「自分にできること」とは、第一に、礼拝し、感謝をささげることです。それから、献金をする、福音を語る、賛美し、祈ることです。このような神に向かう行いを通して、自分の方向性を確実にすることができます。すると、確かに患難は希望に変わります。

「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行いがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。もし、兄弟また姉妹のだれかが、着る物がなく、また、毎日の食べ物にもこと欠いているようなときに、あなたがたのうちだれかが、その人たちに、「安心して行きなさい。暖かになり、十分に食べなさい」と言っても、もしからだに必要な物を与えないなら、何の役に立つでしょう。それと同じように、信仰も、もし行いがなかったなら、それだけでは、死んだものです。さらに、こう言う人もあるでしょう。「あなたは信仰を持っているが、私は行いを持っています。行いのないあなたの信仰を、私に見せてください。私は、行いによって、私の信仰をあなたに見せてあげます。」あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、

身震いしています。ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知り
たいと思いませんか。私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、
行いによって義と認められたではありませんか。あなたの見ているとおり、彼の信仰
は彼の行いとともに行ったのであり、信仰は行いによって全うされ、そして、「アブ
ラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた」という聖書のことばが実現し、
彼は神の友と呼ばれたのです。人は行いによって義と認められるのであって、信仰だ
けによるのではないことがわかるでしょう。」

(ヤコブ 2:14-24)

自分にできることを探し、実行するとき、神様が本当に助けてくださることを体験するこ
とができます。こうして、信仰を確かなものにするすることで、希望を見ることができます。患
難が希望に変わり、そして、実際の解決を体験することができるようになるのです。

神の言葉を聞く上でのカギは、「絶望」です。それは現実と向き合うことを意味します。

今私たちには、誰もが日々直面しているにも関わらず目をそむけている現実があります。
それは、私たちは滅びるという現実です。この現実を聖書は、「虚無に服する」「土に帰る」
「空の空」などと表しています。「結局のところ、全てがむなしい。」と伝道者の書は語って
います。

人生はあっという間に過ぎます。何を努力しても消えてなくなるという現実を人はかなか
直視することができません。しかし、この現実と向き合って絶望するとき、人は、真剣に
神の言葉を求め、神の御手につかまるようになります。すると、神様が、その絶望を希望に
変えるのです。神様は、どうすることもできない死という絶望すら希望に変えてくださいま
した。そのことを知る時、私たちは、生きる意味を知り、自分の人生が無駄でないことがわ
かるようになります。

私たちが天国に持っていくことができる実は、信仰と希望と愛だけです。名誉や富を持っ
ていくことはできませんが、神を信頼する心はそのまま天国に持っていくことができるので
す。苦しみの時、神を信頼する心、愛する心が育ちます。これこそが天国まで永遠に続く宝
です。こうして私たちは、苦しみが無駄に終わらないということを知り、ここに生きる希望
を見出すことができるようになるのです。

イエス様の復活は、それを私たちに教えてくれます。絶望するしかない現実と向き合うな
ら、誠に神の声を聞く者となるでしょう。与えられた神の言葉を告白し、できることをし、
信仰を確かなものにしていきましょう。患難は必ず希望に変わります。自分にできることを
探し、あきらめずに祈り続けましょう。